

この夏、最も印象的だった球児は？

中学野球太郎が選ぶMIP

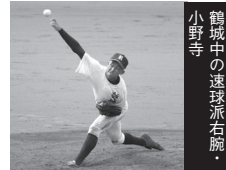
高知中・山下圭太



32回3分の1(タイブレークは除く)を投げて自責点2。エースとして十二分の活躍を見せたが、決勝の試合後、誰よりも泣いていた。「すごく緊張して、昨年の森木さんがどれだけすごいかよくわかりました。森木さんは、人間性もすごい人。自分はまだ全然足りない」中3で150キロを計測し、日本一を成しとげた森木大智(高知高1年)。山下は、森木からフォームを教わるなど大きな刺激を受けてきた。高校でも偉大な先輩の姿を追い続ける。

大会で光った有望球児たち

投手有利の軟式野球。例年どおりにピッチャーの活躍が目立った。浅川中の堂満は、ストレートと変化球の腕の振りがほぼ変わらず、左バッターのインコースに放るスライダー系のキレが抜群。ベスト4の仙北中・長淵星河は、175センチ66キロの細身の体型から、目測で120キロ台後半のストレートを投げ込む。背中側に入りすぎるテークバックが気になるが、「肩甲骨の可動域が広く、後ろに入ったほうが投げやすい」と本人談。日進中・杉江敏希、鶴城中・小野寺晏は気持ちで投げるタイプの速球派で、いい意味での「遊び心」を持ってたら、もっと幅が広がるはずだ。大和中の女子投手・本橋未菜が緩急を巧みに使った投球術で、16回2失点と好投した。



鶴城中の速球派右腕・小野寺

新風巻き起こす浜松開誠館中

全中初出場となった静岡・浜松開誠館中。初戦で京都・青葉中に3対5で敗れはしたが、上位から下位まで鋭い打球を飛ばし、計9安打を放った。「浜松開誠館高校で、中村紀洋コーチ(元近鉄ほか)が指導をしています。高校の方針もあり、中高6年間で打つ野球を目指す。特にこの1年は「強く打つ」をテーマに取り組んできました」下河邊裕生監督の言葉である。3年ほど前から野球部の強化を始めて、専用球場まで完備。今年は春の全日本少年にも出場を果たした。「M号球に変わったことも大きなきっかけでした。しっかりとバットを振り切れば、強い打球を飛ばせる。打撃に力を入れていることは見せられたと思います」強打の双子・本多優、本多駿を中心に、全中を経験した2年生が多く残る。中学軟式野球界に、新しい風を巻き起こす力を十分に持っている。

か結果が出なかった。「先輩たちが強かった分、プレートシャーはありました。ここまで来られたのは、3年生13名の仲がよくて、チームワークがいいから。この夏は、「守備からリズムを作つて、攻撃につなげる」という高知中の野球をすることができました」(キャプテン谷崎陽)

山下圭太、橋田匠吾のバッテリーを中心にした守りが堅く、5試合で1失策。西村監督が毎日ノックを打ち、守備を鍛え上げた。打線は中村元折、川竹巧真の軸の活躍に加えて、6番の三谷高慶が1回戦、3回戦の勝負どころでタイムリーを放つなど、高い存在感を示した。

なお、今大会は「ボールが飛ば」と評判のM号球導入後、初めての全中となったが、スタンドインのホームランはゼロ。観戦していた指導者からは、「意外にボールが飛んでいない。ただ、ゴロやライナーの打球が速くなっているのは間違いない」という声が聞かれた。左の囲み記事で紹介している静岡・浜松開誠館中のように、M号球の特徴を生かしてバッティングに力を入れているチームもあり、これから各校の戦いごとく変化していくか、注目していきたい。